

會



報

1951年9月

157

日本山岳會

國體登山の

あゆみ

入澤 文明

國民體育大會の登山部門を擔當するといふことは、今や日本山岳會にとつて極めて重要な仕事となつてきた。毎年のこの大會の登山をついに計畫し、いかに實施するかは山岳會の年中行事のうちでも一番關心を注がねばならぬ仕事であらう。まづこの大會の過去五年の登山のやり方について一顧を與えたい。

そもそも國民體育大會に、登山の部門も加えようという話は、昭和廿一年秋の第一回大會が京都に開かれた時に始る。敗戦後體育協會が再編成された際登山の部門も含めることとし、日本登山協會の名において松方義三郎氏を理事長とする中央機構が生れた。まだ地方組織にも十分手をつけぬ頃に第一回の國體が京都に開かれる事となり、登山部門も参加を奨められたが、この時は地方の大阪にお願して僅かに講演會と寫眞展を開いて頂く程度に止めざるを得なかつた。翌廿二年金澤で第二回大會が開かれた際には、日本山岳會が登山協會と合體して體育協會に参加して居り、自ら日本山岳會が金澤大會の登山部門を擔當する形となつたのであるが、金澤を中心とする石川支部の方に準備委員會以來万端の仕事を擔當願ひ、本部よりは松方、濱野兩氏が向いて講演會と醫王山の集中登山が行われ

た。廿三年の福岡大會には福岡大分を中心とする九州登山聯盟の岳友に万端のお世話をお願い、福岡市に於ける展覽會、講演會と九重山の集中登山が行われた。前回の金澤大會に際し全國の山岳人が集る機會に話し合う機會をもちたいとの希望に基いて、福岡で参加者の會議をもつたがこれは全國組織の問題に終始しむる失敗であつたと云えよう。九重山の登山も参加者は四百名を超え、山頂を各府縣や團體の旗で埋めるといふ壯觀はあつても、登山そのものについて山岳會は幾何もないという批判を受ける點もあつた。地元、殊に大分縣の官民のこの大會に寄せられた御努力は大變なものであつたが内容的には反省すべき點も多かつた。山岳會はその直後十一月の富士山に雪山の講習會を開き、全國的に百數十名の参加者を得、次の東京大會は富士山で行う自信をもつたのである。

國體登山のあり方について、山岳會内で最も論議されたのはこの時代であつて、少くとも氷雪技術やザイルを使うスポーツ登山の基礎的な要素を使い得る山で、國體登山は行ふべきであるという意見も強かつたのである。第四回は東京大會であつたので、山を富士山に撰び本部と東京支部が全面的に山梨支部にお手傳ひし、新雪の富士ではじめて近代登山の要素をもつた國體登山を實施した。昨年の第五回名古屋大會は、鈴鹿山脈の山が選ばれたが山の容易さから高校生を主體としたことは、山歩きの基本的なものを若い人々に身に

つけて貰ふことを主眼とする以外にはなかつた次第である。この點についても各地方にいろ／＼の批判はあつたが己むを得ない方針だと思ふ。計畫としては御在所岳の藤内壁の岩場を取り入れたので地元三重縣の山岳人は石岡氏の指導の下に半歳の努力をつくしてこの岩場の登路の整備に注がれた。大會當日は豪雨の爲この岩場を使わなかつた事は心残りの次第だが、この努力に對しては心から敬意を拂ふものである。

かゝる経緯を経て今年の第六回は大山に準備が進められてゐる。そのあとづけを見る如く、陸上競技や野球と違つていかなる場所でも同様な條件の競技場があるわけではない。三千米を越す山もあれば一千米級の山で行かねばならぬ場合も生ずる。劃一的な方式の登山をやれない難しさもあるわけである。又毎回この登山を擔當する地元府縣としては莫大な経費を負担することとなる。勿論これは行事の所要以外に山に對する施設費もあり、施設については三、四日間の國體を目的とせず十年、廿年間に亘つてその山に役立つ施設を作らうと本部も熱望し、地元は於てもその方向に進んではおられるが、いづれにしても擔當される縣としては費用に於て、時間、労力に於て、官民の御努力は大變なことである。遠隔の地で行われる事が多い關係上、山岳會の本部としては、いかに氣を揉んでも再々出向いて御手傳ひすることも實際上は出来難いことなので、大綱を決めて地元は實施をお任せする他はないのであるが、地元各位の

絶大な御勞苦に對して、本部も擔當役員のみならず最大の關心をはらつて國體登山の遂行に力を致すことに答かであつてはならない。國體登山に集つて来る参加代表を見ると、山に對する經驗に於て、知識に於て、地方により千差万別である。例えば鈴鹿の場合でも、若し岩場の計畫が實施されたならばこの差異ははつきりと出て来たことであらう。雪のない山、岩のない山の地方の人にはその經驗は自ら淺いことは己むなき次第で、地方により千差があるだけに、また國體登山の意義もあるといふものである。一年に一回全國的に山の仲間が集り、基本的な技術と精神を體驗し、互に切磋する機會を與えらるゝというだけでも、この登山行事の意義は十分であると思ふ。かゝる見地からも國體登山が、集團登山としての最高水準を目指す、所謂選手權大會的な目標をねらうより、その行われる地域の山の性格に基いて、一般的な基本的な登山の要素を盛つた計畫を實施すべき段階にあるように思ふ。

各種競技團體の國際場裡への進出が復活しているにつれて、山の部門でも海外へ進出する機會を待望すること切なるものがある。併し現在のいろ／＼困難の多い情勢下にあつては、大きな海外遠征はよく一團體、一學校のみでは計畫するに難く、全國山岳人の力の結集の上に立たなければならぬ。基盤を培うためにも國體登山の意義は大きいと思はれる。



日本山岳會と私

西岡 一雄

Aさんは某大學の先生である。しかもまじめな登山人である。大學教師という地位は、世間にそうざらにあるものではない。其上至極まじめな現役登山人というものはなおのこと鮮い。更に登山道への打込方が並みかでない、というに至つては珍中の珍である。

この人の曾ての念願は、日本山岳會員たんとするにあつたそうなる。高が山岳會員に、大學先生たる者がならんことを欲したのは、この人の兩眼に映つた昔の山岳會員というものが、ひどく立派であつたので、ひそかに私淑し、どうかして自分も早く、あのような立派な登山家になりたいという心で、爾後大いに山に精進勉強するところがあつた。ところが、そう思っているAさん自身の山行はまことに見事なもので、我等如きかえりみて恥かしい思いを抱く位である。

そのA氏が、これならというので、先輩の故高橋健治氏に山岳會への入會の手續を

頼まれたらしい。

ところが高橋さんの考えは時期尚早であるとして、入會届を握つたまゝいく年か経過した。その高橋さんも今は故人となつて機會は空しく去つたのである。

高橋さんに失望したA氏は、今度は同じ先輩に當る西堀榮三郎さんに希望を打明けるところ、西堀さんも自分はそれに非らずという返事で、入會はまたもや延引ということになつた。思うにこの兩君は、こうして彌々益々Aさんを勵まし、小成に甘んずるなく大成せよという嚴父の志であつたに相違ない。爰に於て根が清純なA氏は、入會困難を嘆じ乍らも、自奮一番黙々と他意なく登山に精勵し今日に至つてゐる。

昔の山岳會とはこういうきびしい門であり、又こんな人もいられたのである。(破門又破門、いく日も藤樹先生の門を叩いていられず、寒夜門前に假睡して遂にその熱意が酬いられて入門を許された熊澤蕃山の如き話しが、昭和の今日、わが日本山岳會にもあつたのである。)

A氏は遂に私に紹介者たる事を頼みに來られた。其時此由來話を承わり吃驚したばかりでなく、私自身省みて實にはづかしく思つた。

今日私のみならず、我こそは登山者で御座いとノウノウとしている人達は山岳會の中にも澤山いる筈だ。そういう人達は、この清純敬虔な、そして寡黙々々として多年登山を續けられたA先生に對して、實には

づかしい次第だと思ふ。

A氏は戦後山岳會への入會は極く容易くなり、戦前との性格一變を、云い換うれば戦前の嚴選主義が、戦後の大衆主義にかわつた事を知られない。だから私への御依頼の時も、窮々乎として三度の拒絶を是れ怖れられたらしい。そこで私は、山岳會の現狀を説くと共に、あなた位まじめに長らく山に打込んだ人なら、山岳會は會の方から迎へが出るだろうといつて、私は欣々として紹介者たる光榮を荷つたのである。根が上州の方とて、東北の山々から、中部山岳、關東關西の山々、その山歴は山岳會員中ても一躍中級以上にあるものと思ふ。

ところがAさんのこの一事が、ゆくりなくも昔の私自身を追憶させるすがとなり、いぜんとして長嘆久しくするに至り、爰に「山岳會と私」なる一文を草するに至らしめた。

明治三十八年は、私の中學四年級の年であつた。どうしたはずみか、私は小島さんの「日本山水論」を一讀した。そこに不二以外夏尚雪を被る山岳が日本にもあることを初めて知つて大いに驚いた。私より先輩の人々は大抵志賀重昂氏の日本風景論によつて、山への眼がひらかれたらしいが、私は「日本山水論」によつて山にひかれた。

故に今なお私は小島さんを徳とし尊敬している。その後「日本アルプス」四巻共よむ中に、いつとはなしに日本に山岳會というものがあつて、その會員のする登山というのがひどくエラク見え、それが尊敬となり、憧憬に化し、自分もそういう會へ入會

したいと思ふようになった。

爰にA氏とちがうところは、私は會員たるべく山へ精進したのではなく、只漠然と小島さんの文章の力によつて山が好きになつたというに止まり、従つて勉強もなく刺戟もうすく目標もなく、卒直にいはば小島さんを通じて山のファンであつたらしい。

明治三十四年頃から、無銭旅行というのが一部の書生間を風靡した。私も早速感受して三十六年には大阪有馬、三十九年には大阪名古屋と學友二三人でこの無銭旅行を決定している。山といへば不二山がたつた一つ、私の足は日本アルプスを踏むどころか、せいさい生駒、六甲、比叡、金剛という名山級低山へしか登れなかつた。しかし登高の一念、より峻峻高山への念願は既に此間に深くきざしがあつたように考へる。

爰で若し私に金があつたなら、そして日本山岳會というものがあることを知つていたなら、恐らく私は直ちに入會したかも知れない。

そして、又それが實現していたとするならば、私の會員番號は榎谷徹藏氏と同じく早期山岳會員の一人となり得ていたかと思われる。

ところが機會は容易に來らず、依然として大阪岡山間を荷車をひいて旅したり、大正六年には支那に居つたので、泰山、嶗山、廬山に遊んだ位であつた。大正九年に歸朝して、始めて本格的登山の手が差のべられた。山岳會員山口季次郎、影山寅造君等があり、大正十一年日本アルプス一週日の大

縦走を試みた。鳥帽子から入つて槍ヶ岳へ出て穂高をかけたのである。

槍の頂上で、榎恒さんや大町桂月氏の名札を見て感激したことを覚えている。それが病みつきで以後連年アルプスへと私の足はむいた。丁度大正十三年、先輩の影山氏に山岳會へ入會の手續を恐るゝ頼んでみた。この届は影山氏の懐に入つた儘、どうしたことが長らく（凡そ六年間程も）握りつぶされていた。最初は氣になるので、催促がましいことをいつてみたり、恐々として轉達方を依頼するが、影山君自身どういう考へであつたか、或はA氏に於る高橋さんの如き考へであつた爲か、或は未熟としたのか、黙殺又黙殺、最後にはこちらで請求を遠慮し、遂にいつとはなしに全く忘れてしまつた。今にして考へてみると、これは影山君に最初から紹介の意志がなかつたのだらうと思う。そして高橋氏の如く好意の鞭撻でもなく、この青二才がということであつたらしい。山岳會とはそういうこゝろであつた。わいとこゝろであつただけは慥かだ。もし此時私の入會届が山岳會に受理されていたら、多分その會員番號は六七百臺であつたであらうか。

そうこうしているうちに、關西でのすぐれたる岳人の中に山岳會の在り方につき、より積極的な動き、舊守の脱皮、革新の氣風というやうな空氣が著しく熟してきて、爰に關西支部をつくり、本部への働きという機運がむいてきた。此時は私のアルプスへの山歴も大分進捗していたので、私もそ

に待望の山岳會へ入會が叶つたのである。關西支部が結束し、一つの力を結集して力強い動きをとうとするに際し、衆力を得るため私如き者も爰にまゝ入會出來たのであらう。とに角うれしかつた。しかし名簿にのつた番號は一千二百臺というので最初の百番臺、中程の六百臺からは大いに遅れてしまつた。

この境遇はA氏によく肖ている。山岳會がAさんの眼におそろしくうつたやうに、私の眼にも近より難い遠い人のようになり、みえた。

私の實力がなくなつて影山君に握りつぶされていたのはまだしも忍ばれもしようが、A氏は戦後になつても山岳會が大衆化して二階から一段と下へ降りて、サアサア誰でも希望者は御出でと迎えていたのに、私が話す迄知らずして、見す見す機会を失して、入會の夢だけをみ續けておられたのは、氣の毒な氣がする。しかし、Aさんはこの間に十分勉強されて、人こそ知らないが、その實力の恐るべきを私はよく知つてゐる。

この話は、いかに山岳會というものが、昔に於て立派なえらい人によつて組織され、そして又いかに實力を備えた會員達の集りであつたかを示す例である。

入會を許可されて後と雖も私の山行には別にかわりはありえない。

だが戦時中、關西の岳人は擧つて山岳連盟の結成する報國登山とか、體操登山へと傾いていつた。行軍登山でなければ山岳人でないやうな様相を示すに至つた。此の間に處して、敢然として、昔からあるがまゝ

の登山、自由な登山、別言すれば山岳會員が從來してきたやうな登山を主張して反抗し續けたのは、私と富田健一君位であつた。ある時は岳連の總會に出席して、故意に私は袋一平氏の論文を披歴し、ある席では亡き加藤泰三氏の小エッセイを高々と聲を強めてよみあげ、それとなく行軍登山側の四谷胤龍氏以下の人々に抗辯をしたことがあつた。

私の如き當時の空氣に對して、明かな異端者でない會員達は、むしろ黙して無言の抗議をしていたらしい。此のグループには京大派の人々、そして水野祥太郎君の如きは矢張り有力な反對派として我々の味方であつた。

戦後になつてもまだこのもつれは残つてゐる。國體登山が行われる毎にくすぶつてはいろいろな批判をきく。しかし、もう私如きが聲をあげて論うべき秋でなく、大勢は各々落付くべきところに落付かんとしてゐる。私は唯昔も今も終始かわりない忠實にしてよき山岳會員であればよい。

さて私は、山岳會に忠實であればこそ、以下のことを考える。

第一は、山岳會は昔からありきたりの山岳會にかえることである。A氏や私がひどく私淑したつた如き、高き山岳會に戻ることである。山岳會のバツチを胸につけて山へ入ると、他の登山者から尊敬され敬迎の眼をもつてあいさつをうけるやうな、山岳會であつてくれと念ずるのである。そのためには會員自ら山岳に精進し、およそ尊敬に値するだけの實力と教養を身につける。

人ではなければならぬ。一つの初登攀一つの大遠征がなされたとき、その眞實なレポートは必ず會誌「山岳」にのつてこそ權威ある公式の承認を克ちうる、という風な會誌、それを發行する山岳會の力、そういう山岳會に立歸ることを望む。

どこにもザラにある會の少し大きい團體が今の山岳會というのでは、愛すればこそ私は不足に思う。幸いにも大家、先輩の多くはこの會に籍をもつてゐる。機構主張を昔に返して、會員の嚴選昔の如く、否より嚴選主義にA氏が困つた如く、私がスポイルされた如くに、よりぬくとき、自らこの體は備わつてくると思ふ。

過日加賀正太郎氏名譽會員の祝賀を大阪清交社で催された。集つた人は昔ながらの古い古い會員とて高い雰圍氣を感じる。就中、あるがまゝの山岳會の傳統と、風格が自ら人々の間にニジミ出ていた。

小島、中原、藤木、今西、三木關西の岳人の珠玉であつた。こういうのが山岳會員であると、私は感じた。胸にあるバツチも久し振りで何だか武功を語る勳章のやうな輝きをもつた如くになつた。

その後東京にもそうした會合があつたらしい。恐らく爰では、より多くの著宿、大家が一堂に會せられたと思うから、よりなごやかな昔日の山岳會の集りが示現したと、信ずる。

愛せられ、敬仰される山岳會。それは、もう一度、山岳會が峠へ登ることだと思ふ。

（カットは川喜田壯太郎氏）



輸送隊と離れた我々は特別な食糧の持合せもなくつたので、ロハルケットでは羊を一頭買込んだ。羊はこれ迄も幾度か喰つたが、餘り美味しいものとは思わなかった。ヒンドウ(インド教徒)は動物を絶対に喰わないが、羊だけは神に許されたものとして別らしい。尤もこれにも時や場所の制限もあるらしいが。

ロハルケットは氣候も可成り暑く、インドの平地の村にでも下りて来たような感じがして、餘り感興の湧かない村であつた。唯行き来る村人には何となく悠長なものが感じられ、我々の氣分迄大いにたるんだ。

ロハルケットの村里を離れてから間もなくサルジュウ河沿いに出たが、二三哩で草付の低い山と赤松が疎らに生えた氣分のよい處があつた。我々はそこからサルジュウ河の左岸に移つたが、この邊としては珍らしい。良い鐵橋が掛つていた。この景色は日本の奥多

摩にでも見られるような風景で歩きながらも氣分がはづんだ。

路は一旦サルジュウ河から離れて又サルジュウ河沿いに出ると、直ぐサマ峠から出ている流れが合流し、そこに架かる立派な吊橋を渡ると往路に合した。どしや降りと蛭と濁流の代りに、よく晴渡つて明るい空と路端の池につかつて首だけ出している水牛が見られ、右側にはサルジュウ河の清楚な流れが見下せた。行き合ふ人も見覚えがある様な氣がして一入懐し

ダック・バンガローと山村

ナンダ・コートの初登頂(續)

堀田 彌一

く、遂にカプコートに歸り着いた。サルジュウ河に架けられた橋を

右岸へ渡ると、道の兩側に家が立ち並び、數丁續いていた。カプコートは前ヒマラヤの山間地では街級の村であつた。郵便局も學校もあつた。竹節はナンダ・コート登頂の第一報をここから発信したし、英語を話す小學校の先生が頻りに親善を行つて来たのも此處だつた。

雜貨店や呉服屋もあつた。私は登山靴では重いので、ゴム底の庭球鞋を買つて履き替えた。靴の底

には made in India と標識されて居たが、我々には made in Japan としか思われなかつた。

その品物は日本のものとそっくりだつたし、値段も日本で買ふのと變らなかつた。村の識者の中には品物の安い國としてのみ日本の存在を知つていた。日本の商品がここ迄進出しているとは想像だにになかつた。全く驚くべき事である。私は土産に附近の部落で織られたホームズパンをこの呉服屋で求めようと思つたが、餘りに

も疎雑なものと値段が割高なのでやめにした。

ダック・バンガローは村の下外れにあつた。道の兩側には石を積んで垣がしてあり、山側は田圃で河側にダック・バンガローが建つていた。敷地は可成り廣く、空地には芝も生えていて小さなグラウンドの様に成つて居り、境界は石垣で圍まれていた。バンガローは二室で、外に番人の小舎が一棟あつた。その間に大きな菩提樹は繁つて居り、屋根を蔽うていた。我々

が行くと先客により既に二室共占領されていた。そこで己を得ずデ

ランシンの家に泊る事になつた。デランシンの家はバンガローより二三丁上手で村の中央にあり、この村では立派な家の一つであつた。然し手摺のついた二階は外目に見た程の事もなく、土間に藁を敷いた陰氣な室は他の住民の家と變りがなかつた。我々は民家に泊つたのは、サマ峠でどしや降りの爲テントが張れなかつたので己を得ず粗末な農家の二階に寝たのと、テジャムのサルカリバニヤ(お上の指定した御用商人)の二階と、ここが三度目である。階下は呉服屋でデランシンの息子が主人である。デランシンはここでは隱居格で、マルトリその他にもある彼の持家へ季節により轉住するとの事である。

日が暮れようとする頃、長い白髭の老人がやつて来て、奇麗な花を捧げ出した。花をもらつた後でわけを聞くと、ナンダ・コートに登つた事がバドリナートやカイラス巡禮と同様に聖地から歸つたという理由で、彼等の最高の敬意に價するものらしい。

翌日バンガローも空いたので早速引越した。ベイス・キャンプで別れた輸送隊とはここで落合事になつて居る。その爲に我々はカ

プコートに三晩も泊つた。

二日目は暫くバンガローを獨占出来たが、夕方二人の英國婦人がビンダリーへ行く爲、やつて来たので一室を提供した。翌朝一旦出發し掛けたが、引返して来て記念撮影を求められた。三日目の晩はラクノウ大學の先生等が三人、秋の休暇を利用してビンダリーへの旅行をする爲隣室に泊り合せた。彼等のカンサマが冗談を誤り傳えた事が切掛で大いに打解け、いつ迄も室に這入らないで冗談と諧謔をも交えながら話合つた。

往きには二室とも占領出来たのでベツドの数も丁度足りたが、こんどは何時も誰かがコンクリートの上で寝なければならなかつた。又晝間は退屈まぎれに通りを歩いたり、河縁にも行つて見たが、主道路を外れると穢いものがあちこちにあつて興味を起さなかつた。道路の山側は僅かに數十米位の平地があつて、それに續いた山裾が段々畑になつて相當上迄開墾してあつた。民家もそれに伴つて轉在していた。時折上から下つて来る羊が道に溢れ、羊の背中に振分けにした岩鹽の袋は重そうで、西藏からの長い旅の間にはやはり故障を引きながらもあつた。蹴を引ながら列について行くものもあつた。

歐洲以外に於ける登山

日 高 信 六 郎

1950 年 度 の

近着のイタリア山岳會月報(一九五一年一二月號)によると、昨年度の日ごまの登山は次の通りである。

○アンナブルナ(ネパール・ヒマラヤ、八〇七五米)。六月三日エルツォグに率いられたフランス隊による超八千米級最初の登頂については本會報で紹介済みにつき省略する。

○ティリチ・ミール(ヒンヅクシュ、七七〇〇米)。アルネ・ネイス教授を隊長とし、地質植物映畫寫眞醫師など九人から成るノールウェイ隊は、六月一日空路カラチ到着、バキスタンを縦断して八日チトラルにつき、翌日三五〇〇米のところに觀測隊本部を設け、南バルム氷河の三段のセラツクを越えて、四一八〇—四六〇〇—五七七五米(六月三十日)とキヤムプを進め、まず前年ネイスが偵察した北東稜を試みたが成らず、南稜に取りつくことにきめ、くち引きで選んだ頂上アタック隊員は外の仕事をやらせず最良の條件に置くことにした。この幸運児はベルグとクヴェルンベルグであつた。

悪天候のため出發が延び、七月二日この二人はストリーザー(連絡將校として同行した英陸軍大尉)と共にポーター六人をつれ南バルム氷河上にベースキヤムプを設定し、五日南稜の支稜に挑んだが、急斜面の雪が不安定なため引きかえし、再舉これを克服して八日約七千米の支稜上に第二キヤムプを設けた。翌日登攀を続けるうちに大雪崩が度々起るにおちたポーターは、大半キヤムプをすて下山した。十日前記二人は重い荷を背にして(テントを運ぶ餘地がなかつた)脊稜づたいに登り雪上に露營し、十一日午後南主稜との接合點に達し、氷洞をほつて夜を明かした。翌朝體力つきたKをのこしB一人でがんばつたが、ザイルなしでは進めなくなつて引きかえし、十三日二人で登りはじめたが疲労の極に達し第二キヤムプに引き下り、そこで新にポーターのハズを加えて二十二日目的を達し、頂上に諸感バキスタン國連の三つの旗を轟した。

一行はその間種々な觀測を測量をつづけ、重要な成果をおさめた。その結果ヒマラヤ山系は大陸棚が隆起したというアルフレド・ウエーゲナーの説を確認した。この山はアンナブルナ、ナンダデヴィ(七八二六米)カメット(七五五五米)について新たに人跡を印した五番目の高山にあたるのである。

○アビ・ガミン(ガルワル・ヒマラヤ、七三五五米)。チュエリツヒの「アルプス探險隊西財團」後援の下に、ケムブリッヂのケネット・ペリル教授以下四名の瑞英連合隊は、切りつめた豫算を以て手輕い準備をととのえ、首尾よく目的を遂げた。

一行は七月二十二日デーリーに集合、ダーゼリンから來たシエルバ四人をつれて出發した。食糧は登攀用の分だけ歐洲から持参し、山にかかるまでは土地のもので我慢した。これは費用を省き行動を敏速にする効果があつた。八月二日マナ峠(五六〇八米)途上の巡禮地バドリナートに到着、その六日後にはチベット領深く入つた。この頃夜は雪、晝は雨がづいて未知の境で見當をつけるに苦心したが、三日の後アビ・ガミンを確認し、ガンツツグ・スミヤ・ダンチウ氷河上五三〇〇米のところにベースキヤムプを設け、ポーターや馬を返した。こゝからは眼の前に

アビ・ガミン、カメット(七五五五米)、ムクット・バルバット(七二四二米)の三傑が聳え偉觀をきわめた。二日がかりで高さ三〇米の氷壁を越えるみちを見つけ、二キロにわたる北々東稜踏破の鍵をにぎることが出來た。かくて五七五〇—六三〇〇—六六〇〇米とキヤムプを進め、遂に七千米に第五キヤムプを置いた。八月二十二日午前十時十五分天候の晴れ間に恵まれて、雪崩にさらされた崖をのり越え頂上に到達した。印度側は深い霧に包まれ、北方チベット高原は赤褐色にひろがっているさまは印象的であつた。約一時間頂上に留まつて地形をしらべ、地圖を作るため寫眞をとつたりした。(隊員ルネ・デイツェル氏の手記による)

○パツフィンランド モントリオールの「北米北極學會」はラブレードの北にあるこの島に學術探險隊を送つた。一行はベアド大佐の下にカナダから地質動物氷河等の専門學者十七名の外、チュエリツヒの工科大学から三名参加し、スイス隊はクックス・コーム(一六〇〇米)に初登頂した。

○南米 ファイ・ファシシュ・コルディラ山系(ペルー)のエルバハ(六六三四米)は、八月初め六人からなる米國隊に屬する二人のハーバード大學生によつて初登攀された。下山の際露營したため二人共凍傷にかゝり切斷手術を受けねばならなかつた。

戦後最初の獨乙隊はハンス・エルトルの下に眼ごましの成果をおさめた。

從來主峯と思われていたイリマニ南峯(ボリビア)に單獨登山の後、三月六日ゲルト・シュレーデルと共に雪庇のひどい瘦尾根からその北峯に初登頂した。彼は正確な測量の結果この方が南峯より三〇米高く六四八〇米を示すと云っている。

彼はさらに六月五日フンドハムマリーと共にコルディラ・レアル山系のコンドリリ(五八五〇米)頂上に三番目の登山者となつた。この山はボリビアのマッターホルンと呼ばれ、初登頂したのは一九四〇年六月三十日獨乙の「單獨登山者」ウィルフレド・キューンである。彼はその後イリマニの山間で墜死した。

悪な岩場と降雪に悩されつゝも、十三日最高峯シュケルダ東峯（四三二〇米）に達し、そこで荒天下の二晝夜を過し、ウシユバ氷河に下つたときには、食糧盡きみな疲れ切つていたが、救援隊から補給を受け天候も回復した。

一行は十八日ウシユバ北峯の北稜に取りつき、氷河と雪庇を克服して二日の後頂上（四六九五米）に達し、悪天候を冒して二十一日夜南峯（四七一〇米）を征服し、南東稜を下り二十五日この行を了えた。

ウシユバ（嵐の山）はエルブルズの南にありコーカサスのマツターホルンといわれ、その美しさと峻しさが知られている。その北峯は一八八八年英人J・G・コッキンがスイスのガイドU・アルマーと初登攀し、南峯は各國の登山家による十一回の失敗の後をうけて一九〇三年獨人A・シュルツェの一行に榮冠が下つた。

シュケルダはウシユバ氷河にのぞむ長い山稜と一連の岩峯より成り、その東峯は一九〇三年シュルツェ一行により、西峯（四二二九米）は一九一〇年スイスのユグ及びラームによつて登られた。

二山ともその後別の稜からも登られ、縦走もされたが、双方をかけての完全縦走は、一九四三、四

五、四九年の三回にわたり、ジョルジア登山隊によつて試みられたが、成功しなかつたものである。

○ルウエンゾリ（アフリカ）

伊太利のビエロ・ギリオーネ等四人は一九三九年一月最高點マルゲリータ峯（五一二五米）に東北稜からの初登頂を遂げた。

彼は一九四九年一月西側の白領コンゴから登山を企て、ムタワング（一一五〇米）から、十六名のボーターをつれて、四日間ジャングルを分け海抜四千米に到つて湖沼森林地帯に達し、四五〇〇米の峠でアレキサンドル氷河の下端にとりつきキヤムプをはつた。それから氷河、岩壁、岩峯、雪庇をのり越えてアルベルト峯（五〇八四米）をきわめ、次で氷壁をのぼつてとなりのマルゲリータ峯に達した。雲が降つていた。

○ホツガル（アフリカ） サワラ砂漠中央西部の町タマンラセツト（一四七〇米）の附近には二千米から三千米に及ぶ安山岩の峻峯が澤山あつて、ドロミテ式の岩登りに、新しい舞臺を供している。

一九五〇年一月ギリオーネは伊山岳會ローマ支部長メツザテスタ、トリノ・スキークラブ會長ジラウドと三人で此の方面に出かけ、最高峯タハト（三〇一〇米）イラ

マン（二九一〇米）に登り、その他三四の處女峰を攀じた。

○アンデス（ペルー）

ギリオーネ、ジラウド兩人は、未知の高山が多い南東ペルーをめざして、一九五〇年六月同國首府リマに行き、伊太利の世話でペルー軍官憲から多大の援助を得、アンデスを越えてタズコに到り、まず軍用機によつて六七〇〇米の上空からコロブナ（六六二二米）アウサンガテ（六二二〇米）の周邊を偵察したのち、アウサンガテの南側に

取りついて、四二〇〇米にキヤムプを設け五六〇〇米まで登つたが同行者凍傷のため引かれし、七月三日再攀東南稜の四九五〇米にキヤムプ（夜間氣温零下二五度）氷河を登つて頂上直下六一四〇米に達したが、悪天候のため引返した。これはこの山に於けるレコードである。

次でアンデス西側のアレキバ市から、七月十六日三日がりの後グルッポ（六〇九〇米）に登り、さらにペルーの地質學者を加えてコロブナをめざし、三五〇〇、五二〇〇、五六〇〇米とキヤムプを進め二十七日急登九時間の後コロブナ西南峯六六二二米に冬期初登頂した。

その後またタズコ地方に戻り、處女峯サルカンタイ（六二五〇乃

至六五〇〇米又はそれ以上と云われる）を試み、先人未到の東南の支峯（五八〇〇米）に達した。尙アムバト（六三五〇米）の頂にも最初の足跡を印した。

○ヴェネズエラ 彼等は歸國の途中ヴェネズエラに立寄り、ピコ・ボリヴァール（五〇〇七米）に風雪を冒して四九三〇米まで登つたが、氷壁に阻まれて引返した。數日後ギリオーネは單身ピコ・デル・トロ（四七六七米）の頂をきわめた。

○キリマンジャロ（アフリカ） アフリカ最高峰のこの山は東（マウエンジ一五二七〇米）西（キボー六〇一〇米）兩峯に分れている。ジョヴァンニ・バレットは一九四九年一月南麓のキボ・ホテル（一四四〇米）から單身出かけた。途中に山小屋があり、みちもハッキリしており、土人を案内とする英人の數バートイにあつた。最後のキボ・ヒュッテ（五二〇〇米）から降雪を冒し、十時間半かかつてキボの最高點カイザー・ウィルヘルムスピッツェに達し、出發後五日目の夜半ホテルに歸つた。頂上に近く火山岩の急崖になやまされたという。

（イタリア山岳會會報一九五一年三月四月及び五一六月號による）

望 展 上 山

少なくとも年に一度は山登りに出掛けていないと、結局億劫になつて、數年間一度も出る機會をなくしてしまふ。とは、たしか近くなつた木暮さんの言葉だつたと記憶する。けだし名言であり、

この著者の言葉を借らずとも、筆者など戰中戦後の五年間體驗したことである。遠征は内地の登山と違つてそう簡單にはやれないが、行かないで大事ばかりとつていればいつまでたつてもできないことである。早大がアコンカグアに行くことは、遠征に對するキッカケをつくり、出くせをつけることで意味のあることに違ひない。立教がナンダ・コートへ出掛けたのも當時の勢力圏への小遠征熱が昂まつた結晶だといつても過言ではあるまい。アコンカグアは未踏の山でもなければ、登山人関心の山でもないが、しかし、ナンダ・コート登頂に對して寄せられた英國山岳會のロングスタッフ氏の祝辭（會報六四號）からしても、なお數年後退したのが登山界の現狀には相應したものと言える。たゞ貧乏四等國の同じヒンターランドに引續き遠征を出す資金力があるかどうか、という點になると心細い感じがしなくもないが（○）

會員通信

スイスだより

松方三郎

八月一日はベルンで島田巽、伊藤藤原兄とおちあい、翌日山岳博物館を見物、昔の參觀者名簿を出してもらつて加賀さんの有名な署名を探がし出したり、二十五年前の自分の名前を発見したり、仲々面白いことでした。

博物館は昔とは丸で變つて立派なものになつていますが、餘りキレイに整理されているもので、昔のように思いがけないものを、思いがけない隅つこに見出して悦に入るなんていうことはなくなりました。

二日は午後ベルン出發、グリーンデルワルドに行きました。驛にエミールとブラバンドが迎えてくれました。そのまゝエミールの宿に落つきましたが、一別以來の話東京の誰彼の動靜など話はつきずその間に、あの時のあの山はすごかつたね、なんて思い出話があいの手に入るの、全く拾収つかぬ有様でした。村を歩けばあつちにもこつちにも何となく記憶のある顔があり、とうてい二十五年もこの土地から遠ざかつていたとは思

われませんでした。しかし山登りの世界には第二次の大戦を境として、少からぬ變化があるようです。田口君や高木君の相棒のヘルマン・シトイリーなど、今日では押しも押されぬせぬオーパーランド

第一のガイドだそうですが、昔のようによいガイドの先輩に鞭撻されながら、思う存分修行をつむなど、いう機會は今日の若いガイドには殆ど望めないそうです。それに昔のように一夏ぶつ通しにやといきりで、ドロミテからドゥファイネまで歩くなどという親分のお客もないので仲々よいガイドが育たないのだと先輩のガイドの話でした。

これには英國人がスイスに來られなくなつたことも大に關係があるでしょう。一事が萬事です。

どうも皆の話の聞いていると、吾々の黄金時代はスイスの山の黄金時代でもあつたように思えるのです。だからブラバンドもエミールも、その頃のことをひどく懐しがつていようです。田口、高木兩君邊りが、そのよい時代の最後の山登りをやつたのではないでしょう。もう一つ極言すれば、アルプスの山登りの正統派は案外日本に來ているのではないかといつたような氣もするのです。少くとも山についての考え方や勉強の仕方

からいえば、日本は今日では數少いその直系をつぐ一つだといふ氣がするのです。

伊藤君はミュンヘンでパウアーに會つて色々話をして來ました。私達はロンドンで二三のA・Oの人々に會ひ積ります。いづれ歸つた上で色々報告しましょう。

(八月五日)

ロンドンへの機上にて

島田巽

松方氏と共にグリーンデルワルドを訪れて、今まで話には何度もきかされていたものゝ、はじめてJACの先輩達の第二の故郷がこゝにあることを、はつきり知りましました。

先輩達のすぐれた行動がいまだにこの土地の人々の印象に深く刻まれているのは、素晴らしいことです。わざ／＼驛に出迎えてくれた二人のガイドが松方氏と二十數年ぶりの久闊を敘して、せき込んで話合ひ、喜び合つていゝ情景は、アイガー東山稜やヘルンリの岩壁を背景として、仲々のみものでした。笑われるかも知れませんが、傍にいた私は目がしらの熱くなるのを禁ずることが出来ませんでした。秩父宮、楨さん浦松さん始めこの谷に深い印象を残した人々が

静かな山

藤島敏男

一日も早く一人でも多く、再び訪れる日が來たら、この土地の人々はどうなかに喜んで迎えるだろうかと思わずにはいられません。今度は僅か三日の滞在で山へ行く暇などなかつたにせよ、書かれたものを通じて吾々に親しくなつていゝブラバンドやシトイリーから、色々の山の話をきき、胸のふくらむ思いでした。詳しい話は松方氏が歸國後、ゆつくりお茶の水で思ひますからこゝには書きません。

ともかく伊藤君と二人で、松方氏と一緒にこゝを訪れる機會を持ち得たことを喜び合つたわけでした。松方氏はベントのビッケル一本をぶらさげ、私はキスリングのおやじから求めたルックザックをかついで、ベルンの畑の中の小さな飛行場から双發ののんびりした飛行機でロンドンへ向つていま

す。いまだドーヴァーの白い岩を眺めながら英國領にさしかゝるところです。當分はまた山を見ずに暮さねばなりませんが、ベルンで仕入れて來た山の本でもよんで、ウサを晴らす積ります。

梅雨前にどこへ行こうと會員川喜田壯太郎君に誘われて、五月廿四日から一週間、沼田、尾瀬沼ヒウチ岳、檜枝岐、會津駒ヶ岳、大津岐峠、銀山平、枝折峠、栃尾又温泉、小出と歩いて來た。

麓は新緑、山は残雪がたつぷり沼も漸く氷が融けたばかりで、岸邊にはまだ浮氷が漂つていた。

ヒウチ岳も沼山峠へひく尾根を夏ならば踏み込みようのない笹がすつかり雪の下で、美しい樺の林を縫つて、頂上へ眞直に登つてゆく氣分はよかつた。

會津駒は、大正五年檜枝岐から引馬峠を川俣温泉へ抜けて以來、僕にとつては久戀の山だつたが、それも雪の上をらくに登れた。銀山平は嘗つて(一九二一年)魚沼駒や中ノ岳を歩いた頃から、僕が一度はと胸に描いていたところであるが、雪融水の滔々と流れる只見川も北ノ又川も、半里に一軒、一里に一軒と點在する開墾地の風情も、豊かな樹の林も、期待に背かない美しさがあつた。

長藏小屋でさへ僕達だけが泊り客だつた位で、ほかの泊り／＼は登山者などに遇う筈もない。夏ともなれば、ペンキ塗のボートに、



また（アベックの英譯）が騒々しく、尾瀬沼は東京の外濠化して、むかし「起て關八州の男子！」など、學生達を叱咤した長藏老人の靈を苦笑させることだろうが。

自然も宿も、靜かに僕達を迎えてくれたが、宿の人達の温かい人情が、まだこんな所が、この日本にも残っていたのかと思うほどで、本當に嬉しかった。悪いところばかりを、さらけ出してしまつた負けいくさの影響も、山の中までは及んでいないのであろうか？

山は季節外れに登るに限る、というのが僕と川喜田君と一致した結論である。

久瀨の上高地

成瀬 岩雄

六月廿四日のウェストン祭當日より前に、文字板をはめ込まねばならぬという、製作者の佐藤久一郎さんと、二十一日の夜新宿を發つて上高地に入りました。今迄ウェストン祭はいつも雨に祟られる時が多かつたそうですが、今年は素晴らしい快晴に恵まれ、久振りで上高地の美しさを満喫しました。何しろ上高地はバスが入るようになる以前しか知らないもので、其後の俗化(?)は聞いていたも

の、昔の印象を汚されるのも厭だと思ひながら恐る恐る上高地に出掛けては見ましたが、大正池の取入口のバスが直角に曲つた途端に仰ぎ見る、残雪に埋められたあの穂高の厭するような壁を見せられた時には、杞憂も何も素飛んでしまい、貳拾何年袂別の友に會う心地して、嬉しさの餘り胸中騒然たるを覺えました。人間なら二十年も會わなければ白髮生え、顔面皺も生ずるでしょうが、何んと變らぬあの稟然たる姿。否むしろ又再び新たな美しさを見せてくれたような氣がしました。まだ幸にして眼は達者ですから上高地の「街」も眼にはつきますが、それにも増して穂高の偉大さは餘りにも、比ぶ可くありません。

上高地に泊つて、上信越邊りのスキー宿並みの扱いを受けて、冷たい味噌汁等食われ、銘仙(?)の着物を着た宿屋のオカミサンや當世流行の洋服まがいの女中等に、「いらつしやいませ」等とやられ、お客が部屋の名前や番號と呼ばれたり、靴の数が、人數の代名詞になつたりされては、たまつたものではありませんが、幸い泊つた所も「上高地の街」からは遠く離れた靜かな宿舎でしたから、澄み渡つた鶯の聲を聞きながらあのベラ／＼と風に揺れる白樺の樹の葉の間から穂高を眺めながら暮しました。矢張上高地はモンベ姿の人と圍爐裏と、ス、ケタ鐵鍋でもなければ、穂高や霞澤を眺めているには勿體ないような氣がして。『國破れて何の山河ありや、と教えられ、又自らも信じて行つた戦争だつたけれども、自然は國家よりも矢張偉大であつた。我々の谷川岳は相も變らず、二つの耳を聳立たせ、虹芝寮は暖い手を差延べてくれる。然しながら、此處數年の山行困難に伴い、山は自然に戻つてゐる。道は藪が生い茂り、澤はその相貌を變えた……』

とは我が山友達であり、愛すべき若き後輩のいつた言葉であります。が、戦後、之程自分の胸を衝いた文章は無いと思つていました。が、今度の上高地の旅は正に自分にとつてはこの若き登山家の言葉を充分裏付けてくれました。

唯残念に思つたのは常さんの居ない事でした。「戦争、戦争つて、メリケンと戦争をしてるのかい」といつたという常さんは「お米の配給制度という事がいくら説明しても納得出來ず、悲惨な食生活が壽命を早めた」等という話を、五千尺のオカミさんから聞き、如何にも常さんらしいと思ひながら、何か上高地から一つの大きなものが消えたような氣がして残念でした。何しろ今のバスの道は昔、増取りに行く常さんだけしか通らない、草生い茂つた細い路だつたのですから。雨の日等、釣竿肩にミノ笠つた常さんが歸つて来る姿が思ひ出されます。

歸つて早速、昔寫した常さんや穂高の寫眞を取り出して、昨日、見て来たばかりの頭の中の穂高と比べて、この筆をとりました。

來年は是非飛騨側に廻つて裏から見た穂高の豪壯な姿を眺め昔を思い出し、常さんや、昔一緒に歩いた中島作之助の墓にでも立寄つて見たいものです。それに、常さんの兄さんは未だ達者だそうですね。

後方羊蹄山

織内 信彦

伊達紋別からマツチ箱に乗り山麓の喜茂別村に着いた日は、無類の快晴だつたが、地元の人とてゐるのを強引に出發した翌六月二十日は、どん帳のような深い雲が山裾まで完全に包んで、いまにも降り出しそうな日でした。

俱知安から半月湖を経て、ニレの大木の繁つた山道を登る頃にはガスの切れ目に、ニセコアンヌブリが隠れし、キラキラ光つて見えるのは、湯船に蛇が出るという山田温泉の屋根だと、同行の村の青年の話。四合目の森林帯はキツ、キの樹を叩く音が靜かな山腹に響いて、同行者以外に人ツ子一人いない山の深さを満喫しました。それにしても、山麓の人達が、私の登山を引きとめたのは、その日の空模様よりも羊蹄山が開き前であり、雪が多いから、ということにあるようでした。

山開き前はこつちの望むところだし、残雪の多いのはお許え向きで、實は願つたり叶つたりでしたが結局五合目から引き返す約束で出掛けました。ところが、五合の避難小屋で「こゝから歸えるテはあるまいね」と言つたら、お眼つけ役のようなその青年が、案外すなおに「行つてみましょう」とのこと。

八合半からは一面の雪田で、吹き渡る風もさすがに冷たく、雪に濡れた地下足袋の足許は少々心細い感じでした。途中で異様な糞をみつけたので聞いてみると、オヤザさんのだという。俄かに心がせわしく足もはづむよう。九合の石室は屋根が吹きとんで使用に耐えそうもない。二時に頂上を踏んで一気に駆け下りましたが比羅夫と俱知安をつなぐ直線的な開墾道路にはうんざりしました。その晩急行で札幌へ出ました。

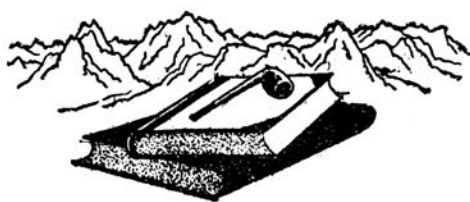


図 書 紹 介

戦後イギリスで 出版された山の本

(會報一五一號の續き)

田 邊 主 計

★Mountain Paths—H.E.G. Tyndale, Eyre & Spottiswoods, 1948 12/6 208pp, 15 illus.

ティンダルはオクスフォード大学マウンテンアング・クラブの初代会長。一九三八年から一九四八年死去までアルパイン・ジナルの編輯を行った。この本は著者の四十年に亘る山と山登り、山の本について心をそそいだ、その成果である。アメリカン・アルパイン・ジナル(一九五〇年)に好感

をもつての書評が出ている。「此の本は我々に教えと共に喜びを與える。山へ登る人々は山頂をねらう事のみに楽しみがあるのではない事を想い起させる點で」である。

一九一一年の R.L.G. Irving と G.L. Mallory と共に行ったアルプスでの登山も記述されている(會報第一五六號望月氏記事参照)。「The New Alpine Library」の一。

★Travellers in Switzerland G.R. de Beer, O.U.P., 1949 584pp, 23 illus.

九四一年(Willa of Ivrea が San Bernardino Pass を越した年)から現代まで千年の間のスウィツァランドでの旅行者のビブリオグラフィカル・エンサイクロペディア。十七世紀までの記述に二五頁、十八世紀に八五頁、十九世紀は三三頁を使っている。一九三〇年に同著者により「アルプスに於ける初期旅行者」が出ている。十六世紀から十八世紀までについてであるから今度のは、それを更に悉くしたものであろう。

★Upon that Mountain

Eric Shipton

Hodder & Stoughton, 1943 12/6
これは戦時中の刊行。アルプス、ケンヤ、エヴェレスト一九三三年、ナンダ・デヴィ、エヴェレ

スト一九三五、三六、三八年、シヤクスガム・カラコラム一九三九年について。

★The Antique Land

Diana Shipton

Hodder & Stoughton, 1950 20/-
エリック・シプトン夫人。南部シンキアン(新疆)及カシユガルに過した六年の見聞記。タイムズのリテラリー・サプルメントの書評中に「これらアジアの大部分はマルコ・ポーロの時代よりも更に外部とは隔離されている」とある。文明が進んでも、このような處々に垣根を作つて入つてはいけなとか、そこから出て行つてはいけないとか不便なことである。

★Tilman & Mount Everest, 1938

は一九四八年に C.U.P. から小型本が出た。献辭に To All "Everesters" とある。

★Mountain Prospect—R.Scott

Russell Foreword by Geoffrey Winthrop Young

Chatto & Windus, 1946 18/-
Xvi & 248 pp, 46 illus, 7 sketch-maps

クライマア、探險家、植物學者として。はじめの二章は少年、青年期ニュウジランド南部アルプスでの登山。五、六、七章に於てエリック・シプトンと共に入つた一九三九年のカラコラムを記

述。それとアルプス、Jan Mayen (北氷洋)への植物探險行等に就て記す。シンガポアの俘虜收容所での三年半の生活がこの本を生んだ。ヒッラン・ジナル(一九四七年)にロングスタッフ博士が書評を書いている。「偉大な書物が、しばしば獄中に於て書かれたが、日誌も地圖も参照すべき文献も一切なくして、かゝる本を書く事は正に「力業」である。著者は早くから植物に興味を持つていて、この書にも植物の香りが隨所に高い「山の風物は植物の記述なくしては完全ではない」「私にはこの本は誠に興味津々たるものがあつた」と評している。

★Postscript to Adventure

Lord Schuster, Eyre & Spottiswoods, 1950 15/- 214 pp

一九四〇年アルパイン・クラブでの告別アドレスを含み(當時七十一才)主として同クラブや其他のクラブの講演等。第九章(五〇數頁)は「ジョン・ティンダル—マウンテンニアとして」。サア・クロオド・シュスタアはアルパイン・クラブやスキ・クラブ・オヴ・グレイト・ブリテンの會長だつた人。その Peaks and Pleasant Pastures (1911) や Men, Women and Mountains; Days in the Alps and Pyrenees(1931)

は人に親まれてゐる。私が山登りについて書く本としては之が最後のものではある」と編者アノルド・ラング・書いづゝ「The New Alpine Library」の一。同叢書には「Switzerland in English Prose and Poetry」も出づゝ。

★Climbs in the Canadian Rockies—F.S. Smythe

Methuen, 1950 10/6
この著者の數多い著書の最後のもの。二五六頁。

★This my Voyage-Mountains and Mountaineering

Tom Longstaff
John Murray, 1950 21/-
著者は一九〇五年(三十才)チベットに入り、一九〇七年にトリズル(二三、四〇六呎)に登頂。一九二二年の第二次エヴェレスト・エクスペディションには「オールド・カマラド」として参加、第三キャンブ(二一〇〇呎)に登つてゐる。一九二八年(五十三才)にはオクスフォード大學のグリーンランド・エクスペディションのリードアであつた。アルプス、カウカサス、ヒマラヤ、ロツキイ、セルカアク(ブリテイシ・コロンビア)スピッツベルゲン、グリーンランドとその生涯の山登りは誠に大きな Voyage である。後年アルパイン・クラブの會長であつ

た。

★The Alpine Annual

Ed. by T.G. Graham Brown
Dent, 1950 25/-

一九四九年のアルパイン・ジナルから編輯。

★Kingdom of Adventure:

Everest-James R. Ullman
Collins, 1948

エヴェレストについての文献から集めて、その全景を眺めようとしている。アルマンの山岳の小説「ホワイト・タウア」は日本譯がある。

× × × × ×

むこうの書評にはミスプリントの事がよく出る。「或章では誤植はマタホルンのルース・ロツクのようにコンモンだ」(ロード・シユスタアの著書)。「私はたゞミスプリントに氣付いた——Svalbard が Svartbad となつてゐる(北氷洋の島)(ロングスタッフ博士がスコット・ラッセルの本に就て)など。

以前ならばこれらの書物はもう當ライブラリに備付けられてゐることだらう。私はこれらの内、日本のお金の流出を氣にしながら、This my Voyage と Mountain Paths とをイギリスへ註文した。

イタリヤ

山岳會々誌

イタリヤ山岳會月報一九五一年一—二月號の記事中目につくものは

一、昨年九月二十三、二十四兩日ミラノに開かれた「山岳團體世界連合UIAA總會」スイス伊ユーゴ・希白アルゼンチンから代表出席、佛代表缺席)で、マッターホルン・ケーブルカーの計畫を是認し難きものとして排斥し、全力を擧げてその實現に反對の闘争を企てる旨の決議を満場一致採擇した。

二、昨年三月アデルボーデン附近に於ける瑞西スキー連盟主催の、一週間にわたる Chef de tourisme の爲の講習参加報告。(ツリスム及び山岳スキー用小舎管理人に對して各般の注意殊に雪崩、氷河上のスキー、遭難者の收容法などの理論と實際を教える)。

三、アルピニズム研究センター設置の提唱。カラビナが割れて墜死した山友の追想に奮起して、現存登山用具の性能のリミットとその出來得る範圍の改善との研究の急務を力説し、研究の對象としてビッケル(取りはずし刃、木材以外の柄)スキー(折り疊み式)アイ

ゼン(ツァツケの改善)その他裝備の改良、雪崩や山崩れの組織的研究等を提起し、差し當つても重要なものとしてビトン、カラビナ、ザイルの三者について理論と實際からその弱點と改良に關する筆者の注意と研究の要點を述べている。

四、伊陸軍地理局新編のモンブラ周邊二万五千分一地圖(六枚)の紹介批評。

五、一九五〇年度歐洲以外に於ける登山(別稿参照)

六、一九五〇年度登山記録。アルプス及びドロミテの新登路やヴァリエーション・ルートにつき、克明に人名登路月日を記載し關係先蹤者をも擧げてある。(S.H.)

アルプス

—スイスの山と人—
(岩波寫眞文庫 30)

作者に人を得た書物は種類の何たるを問はず嬉しい。この意味で先づこの書物は嬉しいものである。また成功したものである。この題名でこうした寫眞集を作るとしたら、監修者として松方三郎氏にまさる人のないことは、山の世界の人なら誰しも首肯くに違いない。寫眞文庫の一冊として本書はもとより一般の人々のために編まれ

たものだが、山に相當年を入れた人のためにも十分たのしいものだ。(T.M.)

ウェストン師

英文碑銘

今年のウェストン祭にレリーフの文字板と英文碑銘取りつけの次第は會報前號に報じたが、右英文は次の通りである。

In Memory

of

The Rev. Walter Weston

(1861—1940)

Order of the Sacred Treasure
(Forth Class)

M.A. (Camb.)

Hon. Member of the Japanese

Alpine Club

Member of the Alpine Club

Fellow of the Royal Geographical Society

Author of

“Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps”, 1896, etc.

who first gave universal currency to the title Japanese Alps for these Mountains.

~~~~~

~~~~~  
會報に原稿を御送り下さい
十五字詰用紙を使用のこと

山岳45年發刊

年頭以來預告をしながら長らくお待たせした「山岳」45年は、豫て發表した内容を以て漸く發刊のはこびに至りました。

本文一八〇頁、寫眞七葉、地圖多數挿入、紙質、寫眞等はもとより體裁も現狀としては最善をつくしたものであり、満足していたゞけると存じます。本號は一九五〇年度分のもので、本年度新たに會員になられた方は一冊一八〇圓(送料共)を御送金の上御受取り下さい。又昨年度會費未納の方には發送を致しませんから至急會費をお納め下さい。

醫療器械一般

携帯用急救醫療器具製作

東京醫科器械製作所

東京都文京區春木町二ノ三六

電話(85) 3750

會 務 報 告

小集會記錄

第一三三回 五月廿四日

ヒマラヤの狀勢解説

(最近のヒマラヤンジャーナルより) 望月達夫氏

第一三三回 六月二十一日

講演 高山植物入門

講師 山下一夫氏

第一三四回 七月十九日

講演 日本アルプスの水河

講師 理博 辻村太郎氏

役 員 會

五月 連絡理事會(十六日)

月例役員會(九日、廿三日)

總務より新理事に關し、會務

運営方針を説明し、次に本年度

の方針を協議。

第六回國體、第五回ウエストン

祭、木暮氏レリーフの件、鳥海

視察報告、業務分擔決定。

第六回國體打合せ(廿八日)山

陰支部より擔任者來會の土地元

提出の計畫案檢討。

六月 連絡理事會(六日、十三日)

月例役員會(廿日)

五月末會計報告、ウエストン

祭、四五年山岳、高山深谷、山日

記、兵庫支部設立の件等。

新舊役員歡送迎會(六月廿七

日)新舊會長、同理事、在京評

議員等出席。

七月 連絡理事會(四日、十八日)

月例役員會(二五日)

第八回國體開催地の件、會報

一五六號編集、第七回國體小屋

の件、會計報告。

會 員 計 報

高井重一氏(會員番號第三四四〇

番、昭和廿四年三月入會)は昭

和廿六年七月十四日西穂高山稜

間ノ岳附近で不幸墜死された。

氏は横濱の相模野會及本會の新

進として活躍し前途を囑目され

ていた。

昭和廿六年度會費

★年額 三〇〇圓

(基本額一五〇圓 山岳代一五〇圓)

★東京支部は五〇〇圓

(基本額山岳の他圖書室維持費

一〇〇圓 支部費一〇〇圓)

會費は會の活動と發展の源泉であ

ります。本年度の會費未納の方は

至急お納め下さい。本會の財政は

印刷費にも事缺く狀況で樂觀を許

しませんので、會員各位の御協力

を切望します。

八木貞助氏(明治三十九年二月入會

會員番號二二番)は昭和廿六年

六月廿日午前八時半腦溢血の爲

長野市狐池の自宅で逝去され

た。行年七十歳。氏は創期會員

であり、また地質學界の權威で

あつた。本會は茲に謹んで哀悼

の意を表する。

圖 書 室 基 金

有志會員の御厚意により、圖書

室の基金も着々増加しつつある

が、七月三十一日現在の狀況は次

の通りで、まだ若干の不足となつ

てゐる。更に一層の御支援を期待

してやまない。

壹千圓 村井米子 五百圓 鈴木

克己 勸銀山岳部 二百圓 青木

巖 壹百圓 藤野利夫

小計 二千三百圓

改造費不足額 一〇、四二六圓

差引不足額 八、一二六圓

オーバリン氏からの受贈圖書

アルバート登頂以來因縁淺から

ざるオーバリン氏から最近左の二

書が會の圖書室に寄贈された。

● Travels amongst the Great

Andes of the Equator, by

Edward Whymper. (edited

with an introduction by F.

S.Smythe), The Chiltern Lib-

rary. 1949, John Lehmann,

London.

● High Heaven, by Jacques Bo-

ell. (translated by D'lys Ow-

en, introduction by F. Mauri-

ac), 1947 Paul Elek, London.

編 集 後 記

近來稀に見る炎暑にうだりなが

ら編集を終えたが、本號が會員諸

兄の手許に送られる頃は、秋風が

峰を吹き渡つて、思はず山服の襟

をかき立てるところとならう。本號

から思ひきつて組方を變え、いく

らか紙面にゆとりをあたえた。會

の財政は頁數をやたらと増すこと

を許さぬし、隔月發行を毎月にす

ることもできない。會費はその年
度内に拂込めばよいには違ひない
が、もともと餘裕のない會計であ
るから、出来るだけ年度の上半期
に納入することが望ましい。會員
が會對する協力の數ある仕方の
なかで、會費の早期納入は最も手
近かな方法であらう、というよう
なことを感じた。(N・O)

昭和廿六年九月三日 發行

東京都千代田區

神田駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會

編集者 織 内 信 彦

電話 (二〇八九番) 日本體育協會

神田 (三二二四番) 振替口座東京四二九番

印刷所 株式會社 技 報 堂

東京都墨田區錦糸町五番地

Château Brillant

山頂で 山小舎で
アルペンの氣分が満喫出来る
純フランス式高級ブドウ酒

サドヤ醸造場 甲府市御納戸町
(現品は山岳會ルームにあります)